

校長室だより

☆教育目標☆

自ら考え判断し、進んで行動できる富中生
〈生活心得〉 時を守り 場を清め 礼を正す
令和2年2月14日発行 No.20
富岡市立富岡中学校 校長 中村 喜雄

☆☆不快感情体験も・・・☆☆

社会のルールや秩序や安全の崩壊を物語る出来事を、日々のニュースは絶え間なく伝えていきます。とりわけ、卑劣な衝動のままに引き起こした事件が目につきます。衝動は情動が外に現れたものですが、自制の努力がどうしても必要な時があります。そのようなことを考えた場合、情動を上手くコントロールする能力を誰もがもちたい、身に付けたいと考えるのではないのでしょうか。

情動は、心理学で怒り・恐れ・喜び・悲しみなどのように、比較的急速に引き起こされた一時的な急激な感情の動きを言いますが、情動のコントロールとは、主に不快な感情の処理の仕方と言っていいのかもしれませんが。今や子どもたちや若者におけるその力の不十分さ・脆弱さを、ニュース報道に接した時だけでなく身近な様々な機会でも感じざるを得ない状況にあります。

ひと昔前までは、欲しいものがあってもすぐには手に入らない、家の手伝いをしなければならぬのは当たり前、遊ぶ時も様々な子と遊ぶのが当たり前、しかも自然の中での行動が主でしたから、思いもよらない問題が起きたり我慢を強いられたりということ、誰もが随分経験しました。その中で、不快な感情をどう処理し折り合いをつけていくか学んだし、自分の感情処理に周りの人に力を貸してもらったりしながら、情動コントロール力というものが自然に身に付いたものでした。

ところが、現在の子どもたちを取り巻く環境の大きな変化は、今、それをとても難しいことにしています。加えて、ネット、ゲームなどの非常に便利な“不快感情消去マシン”が豊富ですから、すぐそれらに頼ってしまい、自分の不快感情を認識して原因を見極めるようにはなりません。ましてや、逃げたくても我慢し勇気を出してそれと真剣に向き合って対処すべき方法を学ぶことなど、できないのです。ですから、そのように育った子は、一定限度を超えた不快感に襲われると“消去マシン”も役に立たず、“正体不明の化け物”から逃れるために、とんでもないことをしてかしてしまうのではないのでしょうか。現在、多くのニュースで報道される事件のように・・・

そういうことを考えた場合、小さい頃から、ある程度不快な感情を体験させ、少しずつ感情処理の仕方を学んでいくことも必要なのではないのでしょうか。



